

難民のために、難民とともに

[www.japanforunhcr.org](http://www.japanforunhcr.org)

# With You

JAPAN FOR



UNHCR

国連UNHCR協会

国連UNHCR協会ニュースレター「ウイズ・ユー」

2024年6月 | 第51号



**特集 地域社会に欠かせない力として。  
世界各地で活躍する難民**

**インタビュー 日本の大学を卒業し夢へはばたく  
ミャンマー出身 テンゾナインさん**



# 地域社会に欠かせない力として。 世界各地で活躍する難民



「難民」と聞くと、あなたはどんな人を思い浮かべますか？

戦争や迫害などで家を失い、命がけで逃れてきた脆弱な人々……。それは多くの難民に共通する一面ではありますが、彼らが置かれた「状況」に過ぎず、彼らの持つ能力やスキル、特性とは関係がありません。

「難民」と呼ばれている人々も、私たちと何ら変わらず、一人ひとりが多様な能力を持ち、無限の可能性を持っています。家を追われるその時まで、社会や家庭で様々な役割を担い、優れた技能や経験を活かして誰かを支えてきた、かけがえのない存在なのです。

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は世界各地で、そうした難民の力を借り、彼らを中心に据えながら援助活動を行っています。今回は、世界各地で地域の一員として力を発揮し、今日も活躍する難民をご紹介します。



クリーンアップ活動。毎月第1金曜日、ほうきとバケツを手にキャンプ中のごみを拾って回る



RCCAのメンバー。マカデミア、ポーポー、レモン、オレンジなど2000本を植えてきた。「木を切ったら代わりに植える」責任を学んでいる



## 「僕たちにはできることがある」 ——ジンバブエの難民キャンプの若者たち

ルワンダ難民のジェアンさん(21歳)は2019年、サイクロン・イダイがジンバブエのトンゴガラ難民キャンプを襲った時のことをよく覚えています。強風と土砂降りの雨は地域に甚大な被害をもたらしました。「私たちの家はひどく壊れました。多くの難民と地域の人々がホームレスになり、私たちの家畜も死にました」。その後、難民キャンプは2021年と2022年にもサイクロンの被害に遭いました。豪雨や異常な高温になることが増え、近隣の川は日常的に氾濫し難民は避難を強いられ、夏は頻繁に気温が45度まで上昇。「私は、災害によって人々が一瞬で家や生計のすべてを失い、人生が変わってしまうことを知りました。難民キャンプで私が目撃し体験したことが、私に行動を起こさせました」。彼女は、2020年に難民の若者たちが立ち上げた、環境問題に取り組む団体「Refugee Coalition for Climate Action (RCCA)」のメンバーに。難民キャンプの人々に気候変動による影響を伝え、環境保全の必要性を訴える活動をリードするようになったのです。



マンゴーの苗を持つジェアンさん。1歳の時にジンバブエへ避難してきた



<トンゴガラ難民キャンプ>  
1984年に設営。主にブルンジ、モザンビーク、ルワンダからの難民1万6000人が暮らす。この20年で難民が増え、薪やシェルター建設等のために多くの木が失われた。UNHCRは、調理用燃料の配布や太陽光発電の井戸の導入等の対策を進めている。

エリーさん(23歳)も、RCCAのリーダーの1人です。2010年にコンゴ民主共和国から逃れてきた彼は、当時をこう振り返ります。「キャンプ中に木がありました。通学の際、暑いと木陰で休んだものです。でも、難民が増えるにつれて木は切り倒され、もうキャンプの端に生えているだけです」。彼らは2020年から、約2000本の木を植えてきました。木は木陰を作るだけでなく、嵐の際には風を防ぎ、土壌の流出を防ぐ役目を果たします。



コンゴ民主共和国南キブ州の政情不安を逃れてきたエリーさん

彼らの主な活動は植林のほか、クリーンアップ活動と難民への啓発活動ですが、最初からうまくいったわけではありません。「難民キャンプでは”気候変動”は未知のトピックで、最初はかなり抵抗を受け、否定的な反応がありました。僕たちは約2000人の若者や子どもたちに啓発キャンペーンを行ってきました。人々のマインドセットを変えたという点で、僕たちは素晴らしい成果をあげたと思います。今では子どもたちも、気候変動を食い止め環境を守る方法を考えるようになりました」。子どもたちは親たちにごみのポイ捨てをしないよう伝え、プラスチックを燃やすこともしなくなりました。

エリーさんは、今こそ行動を起こす時だと語ります。「地球が受けたダメージの中には、もう取り返しがつかないものもあります。でも気候変動を食い止め、次の世代を守るために、間に合うよう行動しなければなりません。人類を守るために、僕たちにはできることがあると信じています」。



# 世界各地で活動する難民・国内避難民



## 「難民」から支援する側へ ——アフガン難民アリさんの ウクライナへの思い

ウクライナで本格的な侵攻が始まった時、アリさんは絶望的な思いになりました。12歳の時に、家族とアフガニスタンからウクライナへ逃れてきた彼は、母国での経験から、戦争が市民にどれほど影響を及ぼすのか知っていました。ウクライナに住んで24年。「私たちは母国よりもウクライナでの戦争を懸念しています。できる限り助けたいと思っています」と語ります。

戦争が始まるとすぐ、アリさんは衣料品店を営む妻と国内避難民のために衣類を寄付し、支援活動にも関わり始めました。マルチリンガルのアリさんは、今NGOの一員となりソーシャルワーカーとロジスティシャン(物資の供給担当)として働いています。心身共に過酷な仕事ですが、アリさんに後悔はありません。「人々の目に感謝の思いが浮かぶのを見る時、最もやりがいを感じます。疲れも忘れる瞬間です」。

**エジプト** エチオピア難民のイグソウさんは、UNHCRの難民受入センターのボランティア。彼のベストの背中には、「私に聞いて」と英語、アラビア語、アムハラ語、ティグリニア語、ヌエル語、ソマリ語で書かれており、避難してきた人々に難民登録やカウンセリングに関するサポートを行っています。

**ケニア** ダダーブ難民キャンプの「Radio Gargar」は、地域で唯一の難民が運営するラジオ局。4つの言語で難民と住民に様々な情報を届けています。ソマリア難民でジャーナリストのラムラさん(23歳)は「女性を取り巻く問題や難民の声を広く伝え、女性をエンパワーしたいです」。



## スーダンの公園で避難生活を送る傍ら、支援にあたる医師

「爆撃の音で目が覚めました」。スーダンの首都ハルツームの病院で働いていた医師、ラザンさん(26歳)の日常は、その瞬間から戦闘、空爆、銃声に取って代わられました。彼女と弟のイブラヒムさんは家から出られず、隣人がくれた水や食べ物でしのぎました。イブラヒムさんは、水を買に行こうとして足を撃たれて負傷。駆け込んだ病院はけが人であふれ、混乱状態でした。弾は取り除いたものの、手術直前に民兵が病院へ押し入り、追い出されてしまいました。

イブラヒムさんが動けるようになると街を脱出し、手術は受けられましたが、学校やモスクなど避難所はすでに満員。2人は公園に避難するしかありませんでした。そんな中でも、ラザンさんは医師としての技術を生かし、避難している人々をサポートしています。多くは脱水症やマラリアにかかった人々です。また、UNHCRの活動にもボランティアとして参加し、避難してきた人々が登録を受け、毛布など支援物資を受け取れるように支援しています。

「UNHCRに協力することは、私に目的を与えてくれました。私はもう単なる“支援を受けるだけの人”ではありません。奇跡を待つことに時間を費やさず、忙しく過ごしています」。今も防水シートの屋根の下で眠り、トイレまで10分という環境にあるラザンさんですが、希望を捨てていません。今後は両親の住むサウジアラビアへ渡り、さらに医学の勉強をしたいと考えています。

**イギリス** バングラデシュの難民キャンプで生まれ、7歳でイギリスへ渡ったキズマツさん。勉強に打ち込み、ブラッドフォード大学では小児看護を専攻。正規の看護師となった彼女が働く病院には、家を追われてきた子どもの患者もいます。「私もこの地域で多くのサポートを受けてきました。恩返しをしたいです」。



## 「私たちが、声をあげなければ」 ロヒンギャの若者たちの決意

「もし私たちが声をあげなければ、自分たちの権利のために立ち上がらなければ、何も変わらず、ずっとこうして迫害を受けて生きていかなければならないのです」。そう語るのは、ロヒンギャ難民のアブドラさん(29歳・写真右端)。彼は約93万人が暮らすバングラデシュの難民キャンプで、難民の姿や生活を撮影し、世界に発信しています。2023年、彼と共に活動する3人の難民の若者たちと共同で、「ナンセン難民賞」\*アジア太平洋地域賞を受賞しました。

\*難民支援に貢献した個人・団体にUNHCRが毎年授与する賞

差別や迫害に苦しみ、権利を奪われ、国籍を持たないロヒンギャの人々。彼らの歴史的な記録はほとんど残っておらず、現状に関する記録の多くは部外者の目を通したものです。

4人のうち唯一の女性であるシャビアさん(27歳)は、2017年に家族と避難してきました。難民の女性たちの体験等を記録し、詩人としても活動する彼女は言います。「私たちの物語は、私たちが存在するということを示すものです。私たちは自分自身の物語を語らなければなりません。私たちが最もよく分かっているのですから」。

ロヒンギャへの国際社会の関心は年々薄れ、資金不足で支援も削減されて人々は苦しい生活を強いられています。彼らは、ロヒンギャの人々の苦難を世界に伝えたい決意をしています。「世界に忘れられたコミュニティにはなりたくありません。私たちが同じ人間だと分かっているのです」。



**コロンビア** 長年の内戦で、世界で最も国内避難民の多い国の1つ、コロンビア。国内避難民のアレハンドラさんは学生かつ母親で、地域の改善にも取り組むリーダー。子どもや若者に読み書きを教えるワークショップの主催、アートや健康、高齢者向けプログラム、清掃キャンペーンなど様々な活動を実施しています。



## 「難民にもできる」 難民キャンプで生まれ育ち、 夢だった看護師に。

ルアンジュさんは、幼い頃トーゴからガーナの難民キャンプへ逃れてきました。彼女が14歳の時、人生を変える出来事がありました。「真夜中に近所の女性が私の家の窓を叩き、私の母を呼ぶのです。彼女は痛みを苦しんでいました。そして私たちが助ける前に、そのまま外で出産してしまったのです」。

医療を受けられない難民が多いことを知った彼女は、看護師になり難民の力になろうと決意します。それは、難民キャンプで唯一の高校に2時間かけて通うことを意味していました。

高校を卒業後、彼女はUNHCRの奨学金を得て大学へ進学します。そしてついに夢を叶え、看護師となったルアンジュさんは、UNHCRと連携して、難民への質の高い教育や医療を広める啓発活動にも尽力しています。「難民にもできます。私は教育や医療、女性のエンパワーメント活動にとっても情熱を持っています。女性を育てれば、世界は変わります」。

「私たち難民にも能力があります。チャンスをください。皆さんはきっと驚くでしょう」

2023年、難民に関する国際会議「グローバル難民フォーラム」\*で、ルアンジュさんはそう訴えました。

難民に手を差し伸べ、平等な機会を提供する。難民が自らの能力を活かして活躍できる。そんな地域社会は、どんな境遇にある人々にとっても生きやすい、より開かれた社会ではないでしょうか。

UNHCRはこれからも、難民と共生し地域の誰もが能力を十分に発揮できる社会を目指します。

\*4年に一度開催の、難民支援に携わる国・自治体、人道支援団体や企業等による会議





## 「日本の大学や大学院で勉強したい！」 UNHCR難民高等教育プログラムを知っていますか？

UNHCR難民高等教育プログラム(RHEP: UNHCR - Refugee Higher Education Program)は、日本で暮らす難民に大学における教育の機会を提供するプログラムで、UNHCR駐日事務所と国連UNHCR協会が運営しています。日本にいる難民の多くが、経済的理由などのため高等教育を断念せざるを得ない状況にあります。大学が授業料と奨学金を支援するこのプログラムは、厳しい生活を送りながらも、大学で知識や専門性を身につけたいと願う難民に大きな希望を与えるものです。2024年春、RHEPを通じて大学を卒業し社会人となったテンゾナインさんにお話を伺いました。

### 日本の大学を卒業し夢へはばたく ミャンマー出身 テンゾナインさん



こんにちは！まず、ご自身のことについて教えてください。

テンゾナインと申します。22歳でミャンマー出身です。好きな食べ物はフルーツ全般、熱帯の果物・特にジャックフルーツです。趣味は中学で始めたテニスと釣りです。3月に北海道で氷上わかさぎ釣りに挑戦し、50匹以上釣りました。

生まれ故郷や、幼少時の様子などについて教えてください。

ミャンマー中部の町で、自然豊かで美しく遺跡なども多い場所です。僕は活発な子どもでしたが病気が絶えず、週に3日は医者通いでした。僕が3歳の頃に両親は日本へ移り、祖母が育ててくれました。僕は何度か高熱を出して深刻な容態になり、母が2度ほど駆け付けたそうですが、12歳頃には丈夫になりました。

ミャンマーから日本へ来た背景を教えてください。日本の第一印象はいかがでしたか。

僕の父は、国内情勢の影響でミャンマーに住み続けることが難しくなり、日本に渡り難民認定を受けました。僕が10歳の時に両親は僕を日本へ呼び寄せようとしていましたが実現せず、その2年後に在留資格を得ました。小6の3学期に転入して、日本語は「あいうえお」から勉強しました。日本は人が多くて街並みがきれいだと思います。

RHEPへの応募や大学受験にどのように取り組みましたか。

RHEPへの応募には、様々な書類や志望動機書、成績証明書など提出するものが多くあります。また、RHEPに受かってでもそれで終わりではなく、最後に大学の面接があり、そこで不合格になる場合もあります。僕は絶対に大学に行きたかったので、RHEPだけでなく一般入試も受け、本気で取り組みました。一生懸命勉強し合格した時には「これからのキャリア・人生において大事な何かをなし遂げた！」とうれしかったです。

明治大学の理工学部に入學されましたが、選んだ理由と、どんな勉強をしたか教えてください。

建築学科で学びたくて選びました。ミャンマーでは5~6階までの建物しか見たことがなかったのですが、日本に来てスカイツリー等を見て、「人間はこんなに小さいのに、こんなに大きな建物が作れるんだ」と感動し、建築の道に進もうと思いました。大学では「意匠設計」(建築のデザイン)などを勉強し、「設備設計」\*を専攻しました。今、僕が目指しているのは「設備設計1級建築士」です。取得がとても難しい資格で合格率は3%以下なんです。

\*空調や音響、照明、上下水など住居の快適な環境作り

4年間の大学生活で印象に残っていることは？

コロナ禍のためずっとオンライン授業で友人もできず、2年間は僕が想像していた大学生活は送れませんでした。学校の課題をひたすら1人するのが辛かったです。授業の履修方法も全く分からず、恥ずかしながら春学期だけで12単位も落としてしまいました。その後、RHEPの先輩方にアドバイスを受け、留年せず持ち直しました。3年生の時には、学生主体の古民家改造プロジェクトで、九十九里の古民家をサーファー向けの民泊施設に改造したんです。15人くらいで家の解体やリフォームをし、家の活用方法まで考えて、とても印象に残っています。

以前伺った「みんなが安心して安全な家に住めることが目標。将来はミャンマーの建築発展に貢献できる仕事に就きたい」という目標\*に変化はありますか。\*「国連UNHCR協会活動報告2020」より

大きな変化はありません。今、僕は水道など水関係の研究にフォーカスを当てています。ミャンマーはけっこう断水するので、皆に水が行き渡るようにしたいです。また、ミャンマーの建物は暑くなりやすいので、自然を活用して暑くなりやすくする家屋を作るなど、より具体的な目標ができたと思っています。

いずれはミャンマーに戻ろうとお考えでしょうか。

先日ミャンマーで、「徴兵制度を実施する」と発表されたんです。軍事政権で徴兵は最後の手段ですし、「まさか、そこまで踏み込むとは」と驚きました。帰国が実現できたらと思っていましたが、当分難しいと思います。正直、「この国はどうなってしまうのか」と不安な気持ちはあります。

ミャンマーについて、日本の方にどんなことを知ってほしいですか。

今は情勢が不安定ですが、ミャンマーには秘境が多く残り、パゴダ(仏塔)やバガン遺跡(仏教の聖地)など、観光にとっても良い国です。ミャンマーは「陽の沈まない王国」とも言われ、夕日が本当に美しいです。バガンから見た夕日は、僕が今まで見た中で一番きれいですね。日本の方にはぜひ一度訪れてほしいです。

### 新しい世界へ踏み出した二人 —— 今、私たちにできること

テンゾナインさんとV.Rさんの希望と意欲に満ちた姿に、RHEPが難民の人生を変える転機となり、日本と彼らの母国をつなぐ優れた人材を育てていることを実感し、うれしく胸が熱くなりました。お二人のご活躍、そして何よりも、ミャンマーとウクライナに早く平和が戻ることを心から願っています。きたる6月20日は、「世界難民の日」。世界の難民に思いを寄せ、連帯を表す日です。日本に暮らす難民のルーツを持つ人々が、みな能力を発揮し夢を実現できる開かれた社会になるよう、私たちが一緒に何ができるのか、考えてみませんか。

最後に、日本の支援者の皆さんにメッセージをお願いします。

僕は日本に来てから、生活や言語などの点で困ったことが多くありましたが、この4年間はRHEPのおかげで安心して学業に取り組むことができ、本当に感謝しています。僕の後ろにはいつもRHEPがいて、定期会合ではみんなの近況報告を聞いたり悩みも相談でき、何よりも心強い存在でした。本当にありがとうございます。

※このインタビューは2024年3月に行われ、情報はその時点でのものです。内容は個人の経験や考えに基づくもので、必ずしもUNHCRの見解を示すものではありません。

そして、テンゾナインさんの卒業と時を同じくして、RHEPのプログラムで大学院へ入学したのは、V.R.さん。ウクライナから日本へ避難してきた女性です。RHEP新入生の一人として、抱負を伺いました。

### 「学び、成長する機会をいただき 感謝しています」 ウクライナ出身V.Rさん

私はクリミアで生まれ、首都キーウ近郊のウクライナ中部で育ちました。私にとって大切な場所がロシアの侵攻を受け、21歳で日本に避難してきました。それ以来、ウクライナからの難民への寛大さと支援に深く心を動かされ、日本の人々の連帯と思いやりを感じています。

私は、世界の平和に積極的に貢献しようと決意し、創価大学の国際平和学研究科に入学しました。戦争の影響を受けた人々の困難から回復する力を目の当たりにし、人道支援やアドボカシーを焦点にしたキャリアを追求しよう、という思いが強くなったのです。

学び、成長する機会をいただき感謝しています。将来は、国際的な問題への取り組みに大きな役割を果たす組織で働き、難民や社会から疎外された人々の権利と幸せを擁護し、平和で公平な世界を作るために貢献したいです。



2023年、来日した母親と訪れた金閣寺で。「大好きな国で母と2週間一緒に過ごせて本当に嬉しかったです」。



## 今号の表紙



サイクロンや洪水の問題に直面するジンバブエ・トンゴガラ難民キャンプで、植林など環境対策に取り組む若者たち

## RUN with HEART

### RUN with HEART

#### 東京マラソンチャリティについて

国連UNHCR協会は、東京マラソン財団チャリティRUN with HEARTの寄付先団体です。東京マラソン財団チャリティを通じたご寄付は、難民の子ども・若者の生きる意志をはぐくむスポーツ・教育支援に活用されます。2025年3月に開催の東京マラソン2025チャリティについては、今後公式サイトやSNSでお知らせします。当協会のチャリティランナーとして走りませんか？

皆様のご参加をお待ちしております。



<https://www.runwithheart.jp/>

### 「世界難民の日」特別上映イベントを開催!

「世界難民の日」(6月20日)に際し、東京五輪に出場した「難民選手団」の勇気と希望に光をあてた珠玉のドキュメンタリー「難民アスリート、逆境からの挑戦」を上映します。奮ってご参加ください。

【劇場開催】6月19日(水)  
東京都内

【オンライン開催】

6月20日(木)～  
6月30日(日)



## WithYou

国連UNHCR協会ニュースレター  
「ウィズ・ユー」  
第51号 | 2024年6月

発行  
特定非営利活動法人 国連UNHCR協会  
[国連難民高等弁務官事務所・日本委員会]  
〒107-0062  
東京都港区南青山6-10-11  
ウェスレーセンター3F  
Tel.0120-540-732  
Fax.03-3499-2273  
[www.japanforunhcr.org](http://www.japanforunhcr.org)

編集  
国連UNHCR協会

デザイン  
NDCグラフィックス

印刷  
TOPPAN株式会社

©Japan for UNHCR  
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

**私**は、小中高と野球をしていてそれほど勉強熱心ではありませんでした。高校卒業後は鉄道会社に就職し、石川県金沢駅の駅員になりました。観光地なので外国人も多く、海外に興味を

持つようになり「もっと勉強したい」と、20歳で大学に入りました。水の仕事に関心を持ったのは、貧富、文化、地域等の違いに関係なく誰もが必要で、どんな人にも役立つ仕事だと考えたからです。民間企業で勤めた後NGOに入り、スーダンで水衛生事業を3年間担当。その後大学院で公衆衛生を勉強し、ユニセフを経てUNHCRに入りました。勤務地は首都から車で約7時間、1万5千人が住むトンゴガラ難民キャンプです。

スーダンでの宿舎にはUNHCR職員も住んでいて、UNHCR事務所の食堂によく食べに行ったのでUNHCRは近い存在でした。当時から、「気さくで冗談好き、地に足の着いた話をする人たち」という印象でした。首都に事務所を置き、難民キャンプには出張で行くだけの機関もありますが、UNHCRは違います。UNHCRは難民のいる周辺に必ずいて、「現地に職員がいる」「現地の意思決定を尊重する」のが特色です。同僚たちが「難民や困難を抱える人々を守るために自分たちはここにいる」などと話すのを聞き、UNHCR職員の持つ難民支援への情熱を感じました。

難民キャンプは砂漠にあり、暑くて乾燥し40度を超える日もあります。夜は毒ヘビに要注意です。かまれたら1時間以内に解毒しないと死亡します。毒グモもいて、寝室で見つけ肝を冷やしたこともあります。

私の職務「水衛生担当官」は、上下水道の整備・運営、ごみ処理、環境対策、エネルギー活用、気候変動対策などが仕事です。例えると「人口1万5千人の町役場の上下水道環境課」のような感じです。キャンプでは、太陽光発電ポンプで地下水をくみあげ約50か所のタンクに送ります。給水所の蛇口をひねると、タンクから水が重力で流れてくるという仕組みです。トイレは、地面に穴を開けコン

クリート等で床を作る、いわゆる「ぼっとん便所」を作る支援です。UNHCRは清潔で安全な水の供給を重視し、トイレ普及、ごみ処理、手洗いなど衛生的な行動の推進と合わせ、感染症対策に取り組んでいます。

## From the Field

難民支援の現場から

29

本田 悠平 ほんだ・ゆうへい



南部アフリカ地域水衛生職員向けの研修にて

私の宿舎はキャンプのそばで、一歩外に出れば難民がいて、彼らの中に住んでいる感覚でした。支援している人々と話ができて、活動へのフィードバックをすぐもらえてやりがいがありました。困っている人への迅速な対応がしやすい反面、うまくいかないと批判され、矢面に立たされます。週末も夜も関係なく、ポンプが止まったり配管が破裂したり、「水が出ない」となるとすぐ対応を迫られ、気が休まらない部分はありました。

印象に残っているのは、キャンプでレストランを営む難民の男性です。キャンプ内のスポーツ協会の役職にも就き、充実しているかに見えた彼が、ある日「ここには人生がない」とこぼして。私は自分の意志でキャンプに来た一方、彼はやむなく私と同じくらいの年でキャンプに来て、いつ帰れるかわからない。返す言葉がありませんでした。他方、キャンプで会った小学生の子どもたちも印象的でした。求められて握手をしたら、私の手をぺろとなめて、わーっと逃げて。キャンプでアジア人は私だけだったので珍しかったんですね。味の違いを確かめようというその好奇心がおもしろかった。彼らには悲壮感や虚無感はなく、未来を感じました。

私は、不条理にも難民や国内避難民になった人々の役に立てればと考えています。日本に、世界の難民へ思いをはせてくださる方が多くいることは励みです。日本も震災等で大変な中、応援してくださる皆様に「どうぞお元気でいてください」とお伝えしたいです。

プロフィール……富山県出身。JR西日本、荏原製作所、AAR Japan、ユニセフで勤務ののち、2022年よりUNHCRジンバブエ難民キャンプ事務所、2024年よりジュネーブ本部で水衛生分野の支援を担当。早稲田大学卒、ロンドン大学衛生熱帯医学大学院修士課程修了。